

(省略)

みゆきによって広がった転校生の噂で持ちきりのクラスが、急に静まり返る。

ガラリ、とドアの開く音がして担任の教師が入ってくる。だが、皆の目はその後ろに注がれている。

噂の転校生に。

その少女が入ってきた途端。

窓から降り注いでいた陽の光が、陰りを見せる。残暑の熱気が教室から失せ、気温が下がったようにさえる。肌寒さすら感じるほどだ。

誰もが、息さえ忘れていた。その転入生の少女から目を離すことができず、口を開くこともできない。

えりんも例外ではない。

一番窓際の列の前から三番目の席。入り口からは離れている席のえりんでさえ、その少女からは圧力を感じる。クラスの男子が使うような言葉で表現するならば、オーラとでも呼ぶのか。

転入生の少女が、教壇に立つ。

彼女は、噂通りに美しかった。

そして――闇のように黒かった。

明堂学園の制服は白を基調としている。男子生徒は白の学ラン。女子生徒は白の上下に胸に大きなリボンがあらわれている。リボンの色は学年ごとに違い、えりんたち三年生は黄色だ。だから、普段の教室は清潔感とでも言うべき明るさに満ちている。

だが、その少女は違う。

黒一色の制服を身に纏^{まと}っている。

まるで――喪服のようだ。祖父の葬式の時に祖母や母が着ていた、悲哀と喪失を象徴する服の色だ。

明堂学園の制服が間に合わず、以前の学校の制服を着ているのだろう。それは分かる。

だが、こんな真つ黒な制服の中学校が果たしてあるのだろうか。

髪は短く、おかつぱ頭。今時珍しい髪型だが、その少女には似合っていた。

その髪の色も、やはり黒い。だが、真つ黒というわけではない。クラスの中には、多少明るい茶色に染めている女子もいるが、彼女の場合はそうではない。

それは深海の色だった。

透きとおった空の青を映した海の水面の色ではなく、全てを飲み込み、光も届かない死の世界のような深海の深い

青の色。

それが、少女の髪の色だ。

そんな黒い少女の中で、唯一白を探すとしたら、それは顔にあった。

ニキビひとつない、つるりとした肌。切れ長の目。高く整った鼻。引き締まった口元。とても大人びて見える。

男子が圧倒されるのも無理のない美しさ。

ただひとつ異彩を放つのが、右の目を覆う白い眼帯だった。その部分だけが、後から付け加えたかのように浮いている。

人間離れた美しさを持つ少女の、唯一の人間らしさだった。

澄んだ水を入れたグラスに一滴の墨汁を垂らしただけで、教室全体が黒に染まってしまったかのように思えた。少女は、それほどまでに圧倒的な黒だった。

訪れた沈黙に耐えかねたように、担任の男性教諭が「自己紹介を」と促す。

少女が挨拶の第一声を放つ。

「あきら、だ」

女子生徒らしからぬ低い少年のような声が、教室に染み

渡る。決して大きくはないが、その声は皆に浸透する。

「それだけか？」

担任が、隣を見る。

あきらと名乗った少女は軽く頷く。

「苗字も言いなさい。できれば、黒板に書いて」

戸惑いながら担任が言うのと、少女はそのまま直立をしていたが、じきに思い直したように黒板に振り向く。

カツカツと白墨が小気味よい音を立てた。

『月影あきら』
つきかげ

丁寧に書かれた字は小さく、後ろの席では見えないのではないかと思われた。

(以下、省略)